

宮山遺跡の溝の謎

◇環濠集落の登場と「倭国乱」

弥生時代は、大規模な集落が作られた時代です。その理由として中国大陸や朝鮮半島から本格的な水田稲作が伝わり、「農業」が始まったからだと考えられています。

水田稲作には田んぼを作り、川の水を引く水路の整備が必要です。これらの土木工事には多くの人手が必要で、大勢の共同作業で稲作は行われます。これが集落を形作るきっかけになりました。また稲作で食糧が安定してくると次第に人口も増えて、集落が大きくなりました。食糧増産のために水田開発も繰り返され開墾競争が激しくなり、拡大を続ける集落同士が衝突することもあったと推測されます。実際に佐賀県の吉野ヶ里遺跡では、深い傷跡が残る人



図1.宮山遺跡の「環濠(1号溝)」

骨や鋭利な刃物で頭を切断された「首なし」一人骨が葬られた墓が発見されていて、当時の激しい戦いの様子がかがえます。

このような戦いに備え、江戸時代の城の堀のように集落の周りを溝で囲むところが現れました。この溝を「環濠※」と呼び、またこのような溝を備えたところを「環濠集落」と言います。弥生時代は環濠集落が各地で作られるようになりました。

当時の日本の様子を記した中国の歴史書『魏志倭人伝』には「倭国乱(大乱)」という記述あり、倭(当時の日本の呼び名)の国々(大規模集落)同士の争いが数十年続いたと記録されています。実はこの「倭国乱」を治めて国々をまとめたのが、あの有名な邪馬台国の女王「卑弥呼」でした。

◇宮山遺跡は環濠集落？

今回の調査では、最大で幅約1.5m、深さ約1.1mの溝(1号溝・図1)が見つかりました。当時は溝の縁に土盛りしたと考えられ、本来はあと数cmほど深いと推測されます。この溝は地形に沿う形で調査区の中央を南北に通る、まるで集落を東西に区切るような印象です。規模や周辺地形から復元すると、他の遺跡と比べても宮山の溝は「環濠」としては十分なものです(図2)。



図2. 宮山遺跡1号溝と周辺地形 (GoogleEarthより調査地点の画像抜粋、一部改変)

しかし1号溝の不思議なところは、溝の両岸に住居がある点です。環濠であるならば環濠の内側に住居があり、外側には住居はないはずですが、しかもこの溝は住居一軒を壊して作られています。

土器の形や年代測定で宮山遺跡の時代は古くは2世紀から最新のもので4世紀の初め頃と判明しました。調査で発見した26軒の住居跡はすべてが同時に建てていたのではなく、約二百年の間に建て替えられていたわけです。溝も最初からあったのではなく、溝も集落の発展に合わせて掘られたのです。

◇共存共栄した阿蘇の集落

ちょうど同じ頃、近くの狩尾湯ノ

口遺跡(宮山遺跡通信No.2を参照)でも同様な溝が掘られたことが調査で判明しています。二つの遺跡を比較してみると、同じような土器を使用しています。またどちらも当時は貴重だった鉄製品が出土しています。鍛冶場のような住居跡が発見されていて、出土品からはお互いに交易していた印象を受けます。また弥生時代の阿蘇の名産品の赤色顔料のベンガラも原産地が限られているため、もし集落同士が対立関係にあるならば、特定の集落がベンガラを独占し、他の集落には広まらなかったでしょう。しかし大量のベンガラがまかれたお墓が両方の遺跡で見つかっています。

以上のことから、阿蘇の弥生時代の集落は距離的に近いこともあって、ベンガラや鉄製品などの貴重品の交易を中心し、対立よりもむしろ共存共栄を目指したのではないかと想像できます。このような状況であえて「環濠」を掘ったのは、それぞれの集落の結束を示す象徴にしたかったのでしょうか? 「環濠」は常に手入れをしないとすぐに埋まってしまいます。「環濠」を維持する作業自体も現代の「区役」のような集落をまとめる共同作業だったと考えられます。

※「カンゴウ」には水堀の「環濠」と空堀の「環濠」の二種類あります。